



# Artificial S 4 P 2 Iaiichita

麦生田 兵吾 **Mugyuda Hyogo** oroyH obuyrum 吾兵 田主麦

2017年4月21日[金] — 5月7日[日] \* 月曜休廊 榎木 黠民 \* [日]日V民2 — [金]日1C民4卒V10S

午前11時-午後7時 金曜日は午後8時まで 了お劫8黠千お日黠金 劫V黠千-劫11箇千

アーティスト・トーク 4月22日[土] 午後5時〜

ギャラリー・パルク次回展の作家である写真家・中澤有基を聞き手に、

麦生田兵吾が自作や本展覧会についてトークします。

※中澤有基展では麦生田兵吾を聞き手にアーティスト・トークを開催予定。

〜劫2黠千 [土]日SS民4 ヲー1・1Sハネーテ

、ジマち間さ基音黠中・寒真実るあう寒サの廻回來ぐハバ・ー11ニサジ

。もまじー1アハジジ会讀親本ササ自ハ吾兵田主麦

。或サ勘閑さー1・1Sハネーテジマち間さ吾兵田主麦おう廻基音黠中※

## Artificial S 4

左手に左目 | 右目に右手

麥生田 兵吾 Mugyuda Hyogo

2017年4月21日[金] — 5月7日[日] 月曜休廊 午前11時 — 午後7時 金曜日は午後8時まで

アーティスト・トーク (聞き手: 写真家・中澤有基) / 4月22日[土] 午後5時～

**KG+** ※本展は[KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017]のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビション」にエントリーしています。



【広報画像01】 本展DM使用画像

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]では、2017年4月21日[金]から5月7日[日]まで、写真家・麥生田兵吾による個展「Artificial S 4 左手に左目 | 右目に右手」を開催いたします。

麥生田兵吾(むぎゅうだ・ひょうご/1976年・大阪府生まれ)は主題として「Artificial S」掲げます。この「S」は“Sense＝感覚(感性)”などの意であり、「Artificial S」とは「人間の手によりつくられた感性・人間が獲得し得る感性」として位置付けられています。麥生田はこの「S」の探求・実験・鍛錬として、自身が撮影した写真をその日のうちにウェブサイト「pile of photographys」(<http://hyogom.com>)にアップするという取り組みを、2010年1月より現在まで7年以上に渡って、毎日途切れることなく続けています。

また、麥生田はこの主題を現在のところ7章に分類しており、2014年に本ギャラリーで開催した個展「Artificial S 2 / Daemon」では、「人の心におさまっている正体を定めないイメージを露にする」を、2015年の「Artificial S 3 / Someone(Another one) comes from behind. “後ろから誰か(他の)がやってくる”」では、「他者との関係性の中での『私』の在り処とは何? 何処?」を、2016年の「Artificial S 1 / 眠りは地平に落ちて地平」では、「触れているけれど繋がっていない、繋がっていないけれど確かに一つになっているもの＝生と死」をテーマとして切り出し、それぞれに深めています。

本展「Artificial S 4 / 左手に左目 | 右目に右手」はその4章に位置づけられているもので、「風景」をテーマとして構成されます。

私たちの目の前には「風景」があり、だから私たちは「風景」を見る。しかし、「風景を見る」とはどういうことでしょうか? そもそも「風景」とは何でしょうか? 「見る」は、目の前に現れる「理解できないもの」と出会う瞬間のことです。そして、「見る」はその瞬間から、目の前に在るものを「理解できる」ものとして捉えようとするものです。この「理解(認識や定義)」とは記憶や経験に基づくもので、つまり、私という同一の視点から見える世界は本来、「私の目の前に在る」ものと「私の記憶や経験に在る」ものの差異を含んで存在し、その差異にこそ「見る」という観察の眼差しが向けられます。

しかし、現代の私たちは、目の前に在るたくさんの差異を「風景」という言葉によって「言語化」し、均一で理解可能なもの(＝風景化)とすることに馴れるうち、いつしか「理解できるもの」しか「見えなく」なっているのかもしれませんが、そして、そのことが私たちの「見る」から、観察の眼差しを失う事態を招いているとも思えます。

展覧会タイトルにある「左手に左目、右目に右手」を想像でなぞり、そこに何が見えるかを思う時、私は「私」の内にある異なる視点・異なる位置を知ることになります。それは均一化していく私たちの「見る」において、「私」の内にはすでに異なる位置があり、それゆえに目の前の「風景」には常に差異があることを示します。同時に目の前の「風景」を均一化せず、そこに様々な差異を「見る」ことは、再び世界の中の「私」の位置を知ることにつながり、本来の「見る」が持っていた観察の眼差しを少し回復することになるのではないのでしょうか。

本展において麥生田は、現在の私たちの「見る」が孕む危惧を「風景」をテーマにすることで明らかにするとともに、それらをあくまでもポジティブなものとしてその迫ろうと目論みます。それは、なにより私たちが、経験したことのない「左手に左目、右目に右手」からのちぐはぐな「見る」を思う(見る)ことが出来るからであり、私たちが「私」の内部にある位置の違いを発見することが、より生き生きとした「見る」を獲得する手がかりになると考えるからです。

※なお、会期中の4月22日[土] 午後5時より、聞き手に写真家・中澤有基(ギャラリー・パルク次回展)を迎え、麥生田が自作や本展について語るアーティスト・トークを開催します。

※本展は[KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017]のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビション」にエントリーしています。

## Artificial S 4

左手に左目 | 右目に右手

麥生田 兵吾 Mugyuda Hyogo

2017年4月21日[金] — 5月7日[日] 月曜休廊 午前11時 — 午後7時 金曜日は午後8時まで

アーティスト・トーク (聞き手: 写真家・中澤有基) / 4月22日[土] 午後5時～

**KG+** ※本展は[KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017]のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビション」にエントリーしています。



【広報画像02】 本展出品予定作品

本展の周知・広報にご協力頂ける際に、広報用画像をご用意しております。本リリース掲載画像からご希望の画像番号および掲載媒体情報を明記の上【info@galleryparc.com】迄ご連絡ください。尚、個人の鑑賞および利用を目的とする場合は、画像の貸出しはお断りしておりますのでご了承ください。

展覧会名 **Artificial S 4 左手に左目 | 右目に右手 麥生田 兵吾展**

出展作家 **麥生田 兵吾** <http://hyogom.com>

会期 **2017年4月21日[金] — 5月7日[日] 11:00～19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで**

イベント **アーティスト・トーク (聞き手: 写真家・中澤有基) 4月22日[土]17:00～・参加無料・予約不要**  
**ギャラリー・パルクの次回展の作家である写真家・中澤有基を聞き手に、麥生田兵吾が自作や本展覧会についてトークします。**  
 ※次回・中澤有基展(5/11～5/28)では麥生田兵吾を聞き手にアーティスト・トークを開催予定。

料金 **無料**

内容 **【写真】写真家・麥生田兵吾による個展。風景をテーマとする写真およそ30点により、「風景」への眼差しを探し、「風景」の在り処を問う。**  
 ※本展は京都市内を舞台に同時期に開催されている[KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017]のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビション」にエントリーしています。

会場 **Gallery PARC [グランマールブル ギャラリー・パルク] 〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル**

アクセス **阪急河原町駅・三条京阪駅より徒歩10分、地下鉄東西線京都市役所前駅より徒歩3分。三条通・御幸町通の交差点北西角 [グランマールブル] 店舗内2階**

問い合わせ **Gallery PARC (正木・武本・村田) 〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル [グランマールブル] 2F**  
**【Tel&Fax】075-231-0706 【Mail】info@galleryparc.com**

## Artificial S 4

左手に左目 | 右目に右手

麥生田 兵吾 Mugyuda Hyogo

2017年4月21日[金] — 5月7日[日] 月曜休廊 午前11時 — 午後7時 金曜日は午後8時まで

アーティスト・トーク (聞き手: 写真家・中澤有基) / 4月22日[土] 午後5時〜

**KG+** ※本展は[KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2017]のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビション」にエントリーしています。



【広報画像03】 本展出品予定作品



【広報画像04】 本展出品予定作品

麥生田 兵吾 | Mugyuda Hyogo

<http://hyogom.com>

1976 大阪に生まれる

現在 大阪府在住

2010 「pile of photographys」をweb上で発表開始(現在継続中) ※1

「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2010」(3331千代田ARTS / 東京): 「Zine port」の一員としてZineを出品

2011 「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2011」(3331千代田ARTS / 東京): 「Zine port」の一員としてZineを出品

グループ展 「in the waitingroom」(waitingroom / 東京)

2013 グループ展「溶ける魚 つづきの現実」(京都精華大学ギャラリーフロール / 京都、Gallery PARC / 京都)

2014 個展「Artificial S 2 - Daemon -」(Gallery PARC / 京都)

グループ展 「2014 FOIL AWARD in KYOTO」(FOIL GALLERY / 京都)

キャンノン写真新世紀2014 佳作受賞 清水穰選

2015 個展「Artificial S 3 - Someone (Another one) comes from behind. “後ろから誰か(他の)がやってくる”」(Gallery PARC / 京都)

2016 個展「Artificial S 1 - “眠りは地平に落ちて地平”」(Gallery PARC / 京都)

2016 グループ展「Emerging KG+ 2016 supported by LUMIX x YellowKorner」(ロームシアター京都 / 京都)

2016 グループ展「showcase #5 “偶然を拾う- Serendipity”」(eN arts / 京都)

2016 企画展「scene | space」(STUDIO MONAKA / 京都)

2017 グループ展「showcase #番外: スナップショット、それぞれの日々」(galleryMain / 京都)

主な出版

2014 雑誌「FOIL vol.4(2014) FOIL AWARD in KYOTO」に作品掲載

## Artificial S 4

# 左手に左目 | 右目に右手

麥生田 兵吾 **Mugyuda Hyogo**

2017年4月21日[金] — 5月7日[日] 月曜休廊 午前11時 — 午後7時 金曜日は午後8時まで

アーティスト・トーク (聞き手: 写真家・中澤有基) / 4月22日[土] 午後5時〜

**KG+** ※本展は[KYOTOGRAPIE 京都国際写真祭 2017]のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビション」にエントリーしています。



【広報画像05】「3つの風景」 インクジェットプリント 2017

### AS 4 左手に左目 | 右目に右手

デタラメに言葉を組んでみました。  
「左手に左目」そして「右目に右手」。  
動詞も加えて、「左手に左目を持つ」「右目に右手を持つ」。  
主語も要る、「私は左手に左目を持つ」「私は右目に右手を持つ」。  
これらの文で表現されていることはどちらも実際にはできないと思いますが、想像を試みることはできる。

想像する。  
あ、どうでしょう、これらの文を思うには、「私」の位置をそれぞれ異なるところに配置しないといけない。  
目は「私」の振る舞いの出発点になる。「見ている私」。

「私の位置」でなんだ? ってなるのでしょうか。  
この言葉に表される位置を把握するには、だれもが「私」になって想像してみるしかない。

まず「私の左手」は、私の目の前そして手元に見える。  
つぎに左目はどうか、左目は「私」に接続しているので、左手までこの左目を届けるには、左目を「私」から引き剥がさないとけない。  
引き離されて「イメージ」となった「左目」を、私は注意深くにける。  
左手に持たれた左目は、確かに「私自身」のだけど、「私」のものとも言うようになり、他者としての色を帯始める。  
見る側だった左目は、私に見られる側に、どうしようもなく成った。そして左目からの視界は、遠く霞んで余所余所しくなっていく。  
何にせよ、「左手に左目を持つ」を持つことに成功した。  
想像だけと。

そんで今度は右のやつだ。  
右目、「右目に右手を持つ」、難しい。  
でも想像なので、やってできないことはない。

では、やります。右手をじっと見つめて・・・  
はい、右目は右手を持ちました!  
右目はギョッと右手を掴んでいます。右手が痛いくらいです。でも右目で右手を持つものだから、目の前が塞がって右目では右手以外何も見えません。  
この姿を確認できるのは、左手に持たれた左目だけです。  
左目は、じっとこちらを見ているのでしょうか、右目ではそれが見えませんが。

左目の映像は白々しく、右手の痛みも全く共有できず、いよいよ遠い他人になっている。

左手は、徐々に乾燥していく左目の手触りにムズムズしている。

そんな余所余所しい左目と役立たずの右目ですが、眼球の身体的な距離でない、「左目」と「右目」の眼差しの出発点違いによって生まれる違和感、単一の眼差しではない関係し合う眼差し、ある位置から位置へと行き来し合う眼差しを生み出す。  
この行き合う眼差し(私の位置)は、本来は異なる領域にあるはずだけど隠蔽されている「目の前(=在るもの)」と目の奥(=記憶そして因襲)の関係をおおづらにするのです。

私のこのような内部の「私」の位置に在りかによって、「目の前」に在る他者の位置もかわりそして見え方がかわり、何かの物陰に隠れるものごと姿を現します。

デタラメな話からでしたが、私は位置に気づくことで、距離が見つけて、そして私は「線」を引くことも覚えました。  
線は視線でもあり、関係性でもあり、境界でもあります。  
ここーあそこ。  
ここから〜あそこまでの線。  
ここまで〜の「ここ」の線、あそこ〜の「あそこ」の線。

この線からあそこの線まで。よーいドン!  
すごいスピード! どんどん加速する! 「線」がみるみる世界を組み立てて行く! 世界自身も追いつけない。

線をうって領土が生まれてしまします。領土は四方を眺め、四方を囲い、囲いは線で表現されます。  
線で囲われた世界。  
世界は「世界」って言葉で表現されることで、世界って心に映る(世界って言葉が生まれる以前は世界はない。差異が無限だった)のおなじ仕組みで、具体的な線で囲われた領域から、世界は私たちの目に風景として映るようになる。(それ以前はきょろきょろの眺めだった。ただと言っても見る見られるといった関係の溶け混じった家族のように親しみのある眺め)しかし「世界」は言葉に風景にされた途端に、その世界の生き生きとした姿は言葉と風景の内側に隠蔽、抑圧され石油でできたような偽りの死の静寂を纏う。このような仕組みは破壊も脱出も不可能だ。  
だって言葉以前、風景以前に帰えたり忘れたりするわけにはいかないのだし。

だから、私たちは生き生きとした世界を呼び戻すことができるとすれば、それは「言葉」と「風景」からその中心からそれ自身から出発するしかない。ゴタゴタ述べるまでもなく、私たちはそうしてきた。

だけどです、現代においては、あらゆる物事が均一化されすぎました。

差異を無視して無理矢理にでも均一化するのが、言葉や風景なのに、そのことを私たちは忘れてしまった。  
私たちの感じることに先行して言葉と風景があり、言葉と風景が私たちの感性を造っている。  
そして私たちは、2つある目がまるで一つしかないように思いついて、だから反省のしかたもわからない。  
言葉と風景をコピーみたいに途方もなく繰り返した先に、私たちはいる。  
言葉と風景の「元」が、もはや遠すぎて見えない。

あ 線も、言葉と風景と同じだ。  
線という形は、本当はない。鉛筆で引かれた線は、線を表現したものにすぎない。  
ただ違うのは線は「線」という概念を表現しているけど、言葉と風景は、概念だけでなく表現そのものを表現している。

話長くなりました。すみません。  
だから言葉や風景を生きるものにするには、「元」を振り返り思うことになるでしょう。

あ 振り返る必要もないかもしれない。  
だって「元」は私たちの内部(目の奥の奥)に原初的にあるものなのだから、新しい「元」を見つければ良いのではないのでしょうか。弱々しいものでいいと思います。  
それを発見できれば、それを手がかりに遥か遠くの「元」も見つけやれることもできると思うからです。  
ただし発見するや否や「元」はたちまち言葉化、風景化するのて扱いが難しくそうです。  
もしまた遠くへ失ったとしても、また見つければいいだけです。何度でも繰り返し続けられればいいだけです。

「私」は、どの位置にいるのか、それを知ることが大切で。  
そして位置は、一つの固定された視点からでは確認することはできません。

「元」が原初的に内部(目の奥の奥)にあるという理由は、「左手に左目 | 右目に右手」の振る舞いを思う事ができるからです。経験より先行する破綻した言葉を、生きるものになっているのは、間違いなく私だからです。